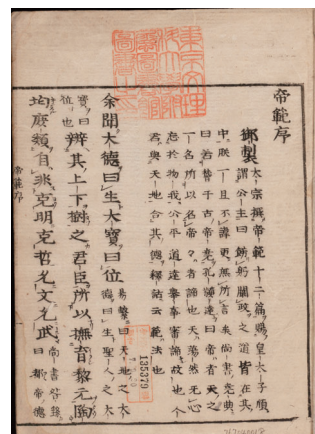
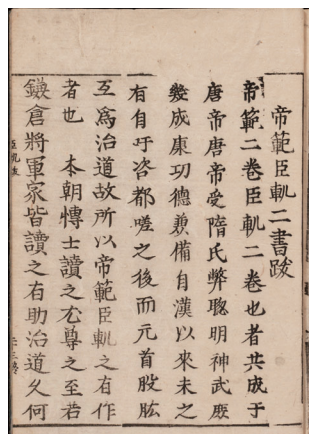
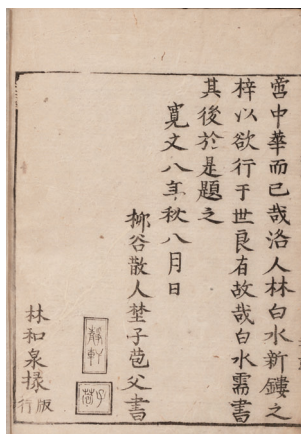


## ◆小特集◆ リーダーの条件：日本の帝王学とその教え

古代から近世に至る日本のリーダーシップ形成に大きな影響を与えた帝王学の思想と教育について、7点の貴重な資料を通じてご紹介します。帝王学とは、理想的な君主像や統治者としての心得を学ぶ学問であり、東アジア全域で広く受け入れられました。日本においても政治と教育の基盤を築く重要な役割を果たしてきました。

展示資料には、儒教的な徳目や忠孝の思想に基づき、理想的な君臣関係や統治者としての心得が具体的に書かれています。本展示を通じて、帝王学が果たしてきた歴史的役割を振り返り、現代におけるリーダーシップの在り方を考えるきっかけとなれば幸いです。



資料1 『<sup>ていはん</sup>帝範』 2巻；『<sup>しんき</sup>臣軌』 2巻 4冊  
(唐)太宗文皇帝撰；(唐)則天武后撰；(日本)關名點  
江戸：林和泉掾 寛文8(1668)年跋

『帝範』と『臣軌』は、中国・唐代に編纂された帝王学の基本文献であり、理想的な君主や臣下に求められる資質と行動規範を説いている。『帝範』は太宗自らが撰し、皇太子(後の高宗)に授けた帝王としての訓戒の書で、2巻12編から成る。君主が「徳を重んじ、民を慈しみ、法と礼による統治を行うべき」とし、忠臣や賢者の進言を受け入れる重要性を述べている。一方、『臣軌』は武則天(則天武后)の命で北門学士グループが編纂したもので、2巻10編から構成され、臣下の忠誠や慎み深い行動の心得を具体的に示している。両書は儒教思想を基盤とし、善政と社会安定を目指す価値観を反映している。日本には平安時代以降に伝来し、公家や知識人に愛読され、江戸時代には幕府の教育政策で武士の教養書として広く活用された。本書は寛文8(1668)年に林和泉掾時元によって出版されたもの。(水野)

[口 880-40]



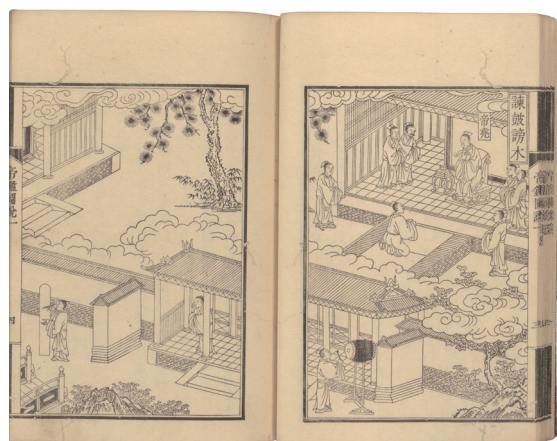
## 資料2 『貞観政要諺解』 10巻5冊

林道春著  
荒川宗長 寛文9(1669)年刊

唐の太宗の言行録である『貞観政要』を和訳した江戸時代の帝王学の教科書。『貞観政要』は呉兢による10巻40篇の編纂書で、太宗が自らを律し、臣下の直言を受け入れる姿勢が記されている。「士は己を知る者の為に死す」という『史記』の言葉に感銘を受けた逸話も含まれる。この内容は君主の理想像を示す手本として広く読まれた。江戸時代に林羅山が編纂した『貞観政要諺解』は、漢文を和訳し読み仮名や語句の説明を加え、武士にも理解しやすい形式に仕上げられた。幕府の安定を目的とした指導者教育の一環として用いられ、儒教的な道德観を広める役割を果たした。本書は、統治者の倫理や政治思想を学ぶための教材として江戸時代の教育において重要な位置を占めていた。

(井川・水野)

〔ヨ 630-13〕



## 資料3 『帝鑑図説』 6巻6冊

(明) 張居正; (明) 呂調陽奉勅撰  
江戸：昌平坂学問所 安政5(1858)年刊

明代の張居正と呂調陽が著した皇帝の治政に関する故事・史評の書である。堯から宋の哲宗までの君主の治政を、善の法とすべき81事、悪の戒めとすべき36事に分類し、挿絵を付して幼帝万暦帝に解説したものである。日本では豊臣秀頼が和刻本を刊行し、徳川家康も愛読している。安政5年版『帝鑑図説』は、徳川幕府の官板として刊行された。漢文に訓点を全面に付した和刻本である。昌平坂学問所は、江戸幕府の教育機関であり、儒教漢学の振興に努め、幕府直轄の学問所として多くの書籍を収集していた。『帝鑑図説』もその蔵書に関わり、教育資料として利用された。儒者らは『帝鑑図説』を講読し、政治や教育の実践に活用した。これは幕府の教育政策の一環として、若い將軍慶福(家茂)の育成にも寄与した。展示箇所は、堯が、人々の忌憚のない政策提言を求めた「諫鼓謗木」に対応している。(井川)

〔ヨ 600-56〕



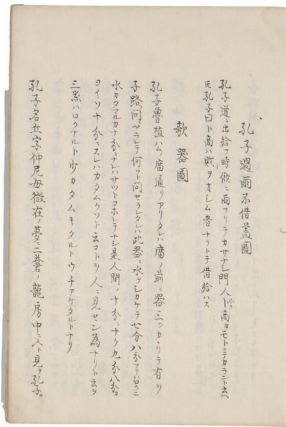
## 資料4 『帝鑑図説』 12巻12冊

洛陽[京]: 八尾助左衛門 慶安3(1650)年刊

本書は江戸時代慶安3年出版の完全な和訳本であり、これを通じてその内容もより一層日本に広まっていった。展示箇所は『帝鑑図説』冒頭、伝説の聖王堯が有能な人材を採用し国を治めた「任賢図治」の部分である。(井川)

〔ロ 580-783〕

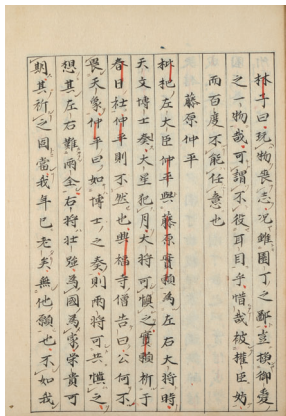




資料5『後素集』 3巻2冊  
狩野一溪著  
藤木弥祖五郎写 文化10(1813)年

狩野派の絵師である狩野一溪<sup>かのういつけい</sup> (1599-1662) によって編まれた画論。中世から近世初期における画題が、「忠孝」や「聖賢」、「帝王」などの項目にまとめられている。それぞれ、主題について論じられており、近世初期における画題に対する認識を読み取ることができる。「忠孝」には、「二十四孝」、「聖賢」には、「敬器」などの儒教に関連する説話があげられる。「帝王」には、『帝鑑図説』と同じ画題が列記されているものの、『帝鑑図説』の内容が単純化され、記される。『後素集』の編纂にあたり、簡易的な画論を作ろうとした意図を感じ取ることができる。(水野)

〔カ 200-80〕



資料6『続本朝人鑑』 2巻2冊  
林鷺峰撰  
延宝2(1674)年写

延宝2(1674)年に林鷺峰<sup>がぼう</sup>が広島藩主浅野綱辰<sup>つなあきら</sup> (1637-1673) の求めに応じて、『本朝人鑑』(寛文2<1662>年)を増補したもの。ただし鷺峰自序によると、完成を前に綱辰は没し、後継ぎの綱長<sup>つななが</sup>が16歳の若年であったため、伯父にあたる三次藩主浅野長治の取り持ちで遺志を継いで完成させたという。原書は「仁厚」「忠義」「英雄」「敏捷」「貞節」「雑品」の6章38条であったが、本書において新たに「孝行」「礼讓」「教誨」「廉直」「度量」「剛勇」「秀才」の7つの徳目を増補し、全体で上下2巻114条としている。出版はされなかったようで、写本のみ伝わる。鷺峰は書生の草稿に手を入れ、各条末に「林子曰」として論評を記している。「仁厚」章では仁政を敷いた天皇・執政の徳を記す。後三条天皇親政で「宣旨升」<sup>せんじます</sup>が考案され民政が安定したこと、高倉天皇が園丁の風流心を感じたことが評価されている。(谷口)

〔タ 480-2〕



## 資料7 『読史余論』 12巻12冊

源君美 (新井白石) 著 ; 萩原裕校正  
江戸 : 和泉屋金右衛門 : 山城屋佐兵衛 万延元 (1860) 年刊

江戸時代中頃の儒学者であり、將軍徳川家宣<sup>いえのぶ</sup>と家継<sup>いえつぐ</sup>にも仕えた新井白石 (1657-1725) による歴史書。摂関政治から豊臣秀吉までの政治史を、実証的な視点で分析している。特に、天皇制や徳川幕府の正当性を論じ、日本の国体について考察する点に特徴がある。単に事実を記述するだけでなく、各時代の政治の評価や改善方策を指摘しており、林家による歴史書とは編纂方針が異なる。本書は、正徳2(1712)年、將軍家宣へ講じた草稿を門弟である土肥霞洲<sup>どひかしゅう</sup> (1693-1757) が写し、さらに白石の次男である宣卿<sup>のぶのり</sup> (1699-1723) らが転写し、享保8(1723)年に完成した。18世紀後半には、教科書のように広く読まれるようになった。(水野)

[ヨ 380-449]

## 参考文献

- 麓保孝『帝範・臣軌』明德出版社、1984年
- 原田種成『新釈漢文大系 95・96 貞観政要上・下』明治書院、1978・1979年
- 北野良枝「狩野一溪著『後素集』の校訂」『鹿島美術財団年報』15 1997年
- 山崎誠「後素集とその研究(上)」『国文学研究資料館文献資料部調査研究報告』18 1997年
- 小助川元太『『後素集』の『帝鑑図説』利用—狩野一溪の画題理解に関する一考察』『国語国文』78(6) 2009年
- 入口敦志『武家権力と文学：柳宮連歌、『帝鑑図説』』ぺりかん社、2013年
- 野田麻美「狩野山楽筆「帝鑑図押絵貼屏風」(東京国立博物館)の研究」『国華』118(9) 2013年
- 竹村則行『『孔子聖蹟図』和版集成』花書院、2014年
- 勝又基『親孝行の江戸文化』笠間書院、2017年
- 石見清裕(訳注)『講談社学術文庫 2642 貞観政要 全訳注』講談社、2021年
- 水野裕史編『アジア遊学 271 儒教思想と絵画・東アジアの勸戒画』勉誠出版、2022年
- 小助川元太、薬師寺君子、野田麻美、水野裕史編『帝鑑図と帝鑑図説—日本における勸戒画の受容』勉誠社、2024年

筑波大学附属図書館常設展 小特集 「リーダーの条件：日本の帝王学とその教え」

解説 谷口 孝介 (筑波大学名誉教授) 井川 義次 (人文社会系教授) 水野 裕史 (芸術系准教授)

令和6(2024)年12月2日 編集・発行 筑波大学附属図書館特別展 WG